

実践まとめシート（１年次）

研究グループ	高等部	実践グループメンバー	小林、有馬
--------	-----	------------	-------

実践タイトル	
学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルによる健康教育の実践事例	
I 問題と目的 特別支援学校高等部学習指導要領保健体育において、「(3) 生涯にわたって継続して運動に親しむことや、健康の保持増進と体力の向上を目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う」目標が掲げられている。現在だけでなく、卒業後の生活においても、自分の健康やそれを支える環境づくりに興味をもち、その大切さについての認識を深めることができる資質・能力の育成が求められている。一方で、知的障害特別支援学校高等部を卒業した生徒の多くが健康問題を抱える傾向にある(光村・菅野, 2009)。また、障害のない成人の週 1 回以上の運動・スポーツ実施率が、過去 3 年において 5 割以上で、「健康のため」を理由にする人が 8 割程度占めているのに対し、知的障害を有する成人は、過去 3 年において 3 割程度で横ばいになり、「特に理由はない・なんとなく」を理由にする人の割合が最も高い(スポーツ庁, 2024)。本校高等部では、運動不足や食事の自己管理が難しいことから肥満傾向にあるなど、健康に課題をもつ生徒が在籍しており、卒業後の健康維持に向けて健康教育を実施していく必要がある。 平成 29 年～令和 3 年の本校校内研究では、本校における健康教育の在り方を検証し、高等部では、卒業後を見据えた「自立に向けて自分で健康を管理する」という視点において、「当事者意識を促すための知識・理解への働き掛け」、「相互理解ツールの活用」、「個別的で継続的な支援」、「スモールステップな目標設定支援」、「家庭との連携」の 5 つの観点を取り入れた実践が有効であることを報告している。一方で、学校や家庭以外の地域社会資源との連携を効果的に指導に活用する必要があることを課題として挙げている。 そこで本取り組みは、学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルによる健康教育の在り方を検討した。	
II 実践方法 1 対象生徒 高等部第 1 学年生徒 6 名を対象とした。 2 実践の手続き 初めに、本校における健康教育の在り方を検証した過去の校内研究で報告した「自立に向けて自分で健康を管理する」視点における 5 つの観点を参考にし、本校での健康教育の実践する環境を整えた。 次に、学校と地域を学びの場にするにあたり、地域と協働して学習活動を展開する必要があるため、令和 4～5 年の本校校内研究で取り組んだ地域協働型の学習成果を高める方法を参考にし、地域との協働を進めた。 2 つの研究成果を土台とし、学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルによる健康教育の実践を進めた。実践手続きのイメージを図 1 に示す。具体的な実践手続きを以下の (1)～(3) に示す。	
図 1 実践の手続きのイメージ	

(1) 「自立に向けて自分で健康を管理する」力を育む実践

平成29年～令和3年の校内研究で成果として挙げられた「自立に向けて自分で健康を管理する」力を育むためのポイントを参考にして、単元や授業を構成した。実践した内容を以下に示す。

① 当事者意識を促すための知識・理解への働き掛け

健康のための運動や食事に関する授業を行うことで、健康に関する正しい知識と理解により、行動変容への内発的動機付けとなるようにした。

② 相互理解ツールの使用

学校で取り組んだ運動を記録する機会を設定することで、自分の課題に気付くきっかけとした。

③ 個別的で継続的な支援・スモールステップでの目標設定支援

運動に関する月間目標を設定するとき、個別で対話しながら目標を決めることで、スモールステップで目標を設定できるようにした。また、振り返りにおいては、教師の評価をフィードバックすることで、客観的な自己理解を促した。

④ 家庭との連携

連絡帳や保護者面談の機会において、学校で取り組んでいる健康に関する学習の様子を知らせ、家庭でも意識できるように促した。また、保護者に健康に関するイベントの参加を促し、生徒と保護者で健康について考える機会を設定した。



図2 「当事者意識を促すための知識・理解への働き掛け」の授業の様子



図3 「家庭との連携」として生徒と保護者がイベントに参加する様子

目標		
何の授業で	朝の筋トレ	何を [redacted] が教えてくれた運動
どんなふうに	下半身を伸ばして足を動かす	どうやって変えた目標 1回に教えてもらったことも取り組んで
ふりかえり		
	自分	先生より
1回目 (12/3)	次もやります!	いい運動が下着です。 トレーニングやります。 いっしょにやりました。
2回目 (12/11)	スクワットの変わりになりました!!	足もきたるんやでやっ。 ヒップも言ってるや。 いっしょにやりました。
3回目 (12/13)	ランジも取り組みました!!	自分から言いたいトレーニング も運動のことやっやっ。 です。やりました。
4回目 (12/18)	来年も頑張ります!!	写真

図4 「相互理解ツールの使用」「個別的で継続的な支援・スモールステップな目標設定支援」のツールとして使用した目標設定・振り返りシート

(2) 地域協働型の学習活動の構築

学校と地域を学びの場にするにあたり、地域と協働して学習活動を展開する必要があるため、令和4～5年の本校校内研究の地域協働型の学習成果を高める方法を参考にし、学習活動の構築に取り組んだ。

① 生徒が学びやすい状況づくり

地域の人との打ち合わせの時間を多く確保したり、生徒が初めて地域の人と関わる時、自己紹介や質問コーナーの時間を設定したりすることで、生徒が安心して地域の人と関わるができるようにした。また、地域の人も生徒への関わり方などを知る機会とした。

② 日常的なつながりの構築

単元の初めは、産業現場等における実習の振り返りを起点に、実習中の健康状態に注目するところから始めた。自分の健康について考える中で、健康のために活動する地域の人や施設に注目し、地域のスポーツジムのスポーツインストラクターから健康づくりやスポーツジムについて学ぶ機会を設定した。その後、スポーツインストラクターからスポーツジムの利用者、公共施設利用者など、関わる地域の人々の幅が段階的に広がっていくようにした。

(3) 学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルの実践

「地域の人が健康になるためにできることを考えて実践しよう」をテーマに授業を行った。

1回目は、地域のスポーツジムで開催する「ボッチャ交流イベント」の運営、2回目は、公共施設で開催する「健康交流イベント」の運営を設定した。どちらも地域のスポーツジムと協働で運営し、地域の人にボッチャを知ってもらう、体験してもらうことを通じて、健康増進につなげることを目標に取り組んだ。

学びを生かすサイクルの実践で、エージェンシーの視点で支援を行った。OECD が定義する生徒エージェンシー（目標を設定し、振り返り、責任をもって行動することによって変化を起こす力）のキーワードとなる「目標設定」、「振り返り」、「責任ある行動」に着目して支援を行った（表1参照）。

表1 エージェンシーの視点における支援

	目標設定	振り返り	責任ある行動
支援	・初めは、教師が地域のスポーツジムとの打ち合わせにより、活動内容、目標を決定し、生徒に提示した。今後、自分たちで立案して実践する「練習」と説明した。	・振り返りの大切さ、方法を確認した。 ・当日の映像を見ながら、振り返りを行った。	・自分から行動することが難しい生徒に対して、生徒の実態に合った役割を提案し、行動を促した。
	・計画書、報告書の様式を作成し、事前学習や事後学習に組み込むことで、学びを生かすサイクル内で自然に目標設定や振り返りが行えるよう基盤を作った。		
	・1回目のイベントの振り返りで自分の課題を考えた生徒は、2回目のイベントでその課題を意識して行動できるよう、目標設定時に1回目の課題について話題にした。また、当日は課題達成につながる具体的な行動を促した。		

3 単元計画（生活単元学習）

（１） 単元名 「FTK 健康プロジェクト」

（２） 単元の目標

- ① 健康に関する知識を身に付けることができる。
- ② 自分や地域の人々の健康課題に対し、自分たちにできることを考えて行動することができる。
- ③ 健康について学んだことを生活に生かそうとする。

（３） 指導計画

	学校	地域	備考
毎月	・健康に関する目標設定、振り返りをする		
1	・現場実習の事後学習として、実習中の健康について振り返り、健康を維持する大切さについて学ぶ		【単元前半】 地域協働型の学習活動の構築
2		・スポーツインストラクターから健康づくりについて学ぶ	
3	・地域の人々が使う健康のための施設を調べる		
4		・スポーツジムを訪問し、地域の人々が使う施設を見学、体験する	
5	・スポーツジム訪問の振り返りを行う		
6 7	・スポーツジムで開催する「ポッチャ交流イベント」に向けて、目標設定・準備をする		【単元後半】 学校と地域を学びの場とした、 学びを生かすサイクルの実践
8		・「ポッチャ交流イベント」を運営する	
9	・イベントの振り返りを行う ・公共施設で開催する「健康交流イベント」に向けて、目標設定・準備をする		
10		・「健康交流イベント」を運営する	
11	・イベントの振り返りを行う		

4 評価方法

- （１） 健康に関する知識やイメージを評価した。質問紙調査により、「健康について知っていることやイメージを教えてください」（自由連想法）と質問した。評価は、単元開始前及び中間（スポーツジム訪問の数日後）、単元終了後（イベントの数日後）に行った。生徒が回答したテキストデータは、テキストマイニング手法のKH coder を使用し、共起ネットワークを作成した。共起ネットワークとは、文章内の単語の出現頻度や単語同士のつながりを図式化したものである。なお、共起ネットワークでは、対象語の出現回数が円の大きさで、共起性・関連性の強さが線の太さで表現される（樋口、2023）。単語の出現数や単語同士のつながりの変容を検討した。

- (2) 授業後に配付した生徒の感想が記載されたワークシートを評価に用いた(自由連想法)。(1)と同様にKH coderを使用し、共起ネットワークを作成した。単元前半の期間に記述した感想と単元後半の期間に記述した感想の単語の出現数や単語同士のつながりの変容を検討した。ただし、単元後半は1回目のイベント振り返りまでの感想を分析した。
- (3) 録画した映像やワークシートなどの記録から、エージェンシーに関連する場面を探し、該当するエピソードをまとめた。グループメンバーで協議しながら行った。

5 倫理的配慮

対象生徒が所属する特別支援学校は、在籍児童生徒の学びと成長を保障する他に教育実習や研究の場としての使命も担っており、事前に十分に説明した上で、保護者より研究協力及び成果公開の同意を書面で得ている。また、校内で個人情報の保護をはじめとする倫理的課題について十分に検討した上で本研究の実施と公開にあたっている。

Ⅲ 指導の実際

学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルの実践の様子を以下に示す。

表2 学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルの実践 スケジュール

実施日	内容	
1/20	目標設定・準備	サイクル1 巡目
1/28	「ポッチャ交流イベント」の運営	
1/29	振り返り	
2/10	目標設定・準備	サイクル2 巡目
2/16	「健康交流イベント」の運営	
2/17	振り返り	

1 1/20 目標設定・準備(サイクル1 巡目)

(1) 今後の活動の確認

地域のスポーツジムの訪問した際の「自分の健康だけでなく、周りの人の健康のために活動してほしい」というスポーツインストラクターの発言を振り返り、今後の活動として、「周りの人が健康になるためにできることを考えて実践しよう」を目標にして、プロジェクトを計画して実践することを確認した。



図5 話合いの様子

(2) プロジェクトの実践に必要な手続きの確認

プロジェクトを実践するにあたって、必要な手続きを確認した。確認したことを以下に示す。

- ・同級生や担任の教師との話合いを経て計画を立てる
- ・計画を実施して良いか、高等部主事や管理職に伺う
- ・地域の人と協力する

(3) 教師からプロジェクト内容の提案

地域のスポーツジムで開催するボッチャ交流イベントの運営を通して、目標の達成を目指すことを提案した。また、今後の自分たちで考案したプロジェクトの実践に向けた練習も兼ねて行うことを確認した。

(4) 具体的な取組の確認

事前の準備として、「ボッチャの紹介」リーフレットを作成し、地域の人に見てもらうことを提案した。当日は、参加してくれた地域の人に、ボッチャを知ってもらえるよう行動することや一緒にボッチャをして楽しむことが役割であることを確認した。

(5) 計画書の作成

生徒間で確認しながら、計画書を作成した。計画書は、「活動の目標」、「いつ」、「どこで」、「協力してくれる人」、「私たちの役割」の項目があり、1つずつ確認しながら完成させた。

(6) 「ボッチャの紹介」リーフレットの準備 ※別日に実施

リーフレットの内容は、教師が考案した「ボッチャとは」、「ボッチャのルール」、「健康に良いこと」を提示した。役割分担し、タブレット端末を使用してスライド作成に取り組んだ。作成の途中で、進捗状況を報告し、学級全体で確認しながら完成を目指した。

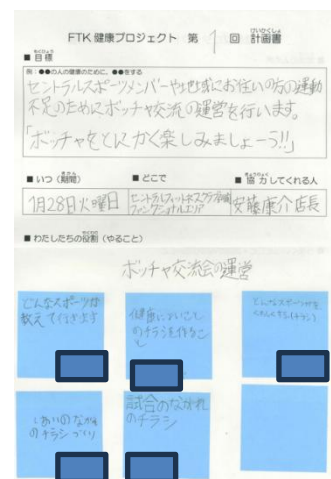


図6 サイクル1巡目
計画書

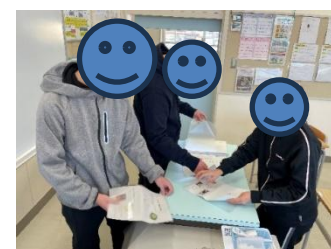


図7 リーフレットの
準備の様子

2 1/28 「ボッチャ交流イベント」の運営(サイクル1巡目)

(1) 会場設営

スポーツインストラクターの指示を聞き、会場の設営を行った。参加者が座る椅子やボッチャのボール、得点マットを準備した。得点マットの設営では、どのくらいの距離から投げたら良いか、スポーツインストラクターから質問があり、生徒で考えて投げる場所を決めた。

(2) ボッチャの紹介、投球体験の運営

興味をもち、言葉を掛けてくれた参加者に対して、リーフレットを渡し、質問に答えた。「投げ方」の質問に対して、説明することができた。その後は、参加者やスタッフが他の利用者を誘うことで参加者が集まった。参加者が列になり、1人ずつ投球体験した。生徒は、投げ方の説明やボールの受け渡し、応援、見守りを役割分担して行った。

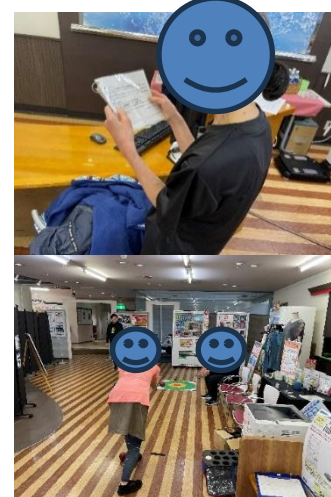


図8 「ボッチャ交流イ
ベント」の様子

(3) 参加者と試合

スポーツインストラクターの言葉掛けにより、集まった参加者と生徒で試合を行った。生徒と参加者が同じチームになったとき、チームで自己紹介をして、投げる順番を決めた。試合は、スポーツインストラクターが審判や進行を行った。

3 1/29 振り返り（サイクル1巡目）

(1) 新たなイベント運営について

公共施設で開催する健康交流イベントの運営の依頼があったことを伝えた。地域のスポーツジムの出展として、ボッチャ交流イベントと同じように、地域の人にボッチャを紹介して、体験してもらう内容を確認した。

(2) 振り返りの大切さについて

振り返りをして次に向けて準備する大切さについて確認した。振り返りの方法として、映像を見て分析する方法やグループで意見を出し合う方法、アンケートをとる方法があることを確認した。

(3) 映像による振り返り

当日の映像を見て、自分たちの役割や成果、課題を探した。映像は、教師が場面を抽出し、生徒に気付かせるように提示した。

(4) 客観的な評価の確認

参加者やスポーツインストラクター、学級担任からの感想を共有した。課題として、目標を達成するために、「ボッチャが健康に良いこと」を宣伝していくことが必要になることを確認した。

(5) 報告書の作成

「うまくいったこと・次回がんばりたいこと」を個人で記入した。記入後、学級で記入したことを共有した。



図9 振り返りの様子

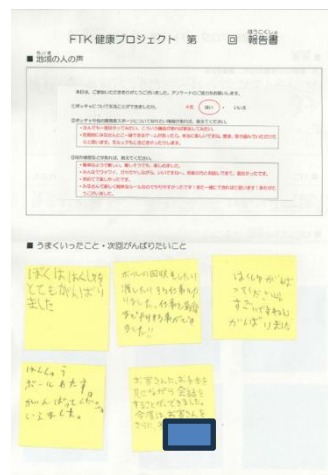


図10 サイクル1巡目
報告書

4 2/10 目標設定・準備（サイクル2巡目）

(1) 教師からのプロジェクト内容の提案

1回目のイベントの振り返りを生かして、「地域の人にボッチャが健康に良いことを知ってもらう」ことを目標にする提案をした。

(2) 具体的な取り組みの確認

ボッチャが健康に良いことを知ってもらう方法として、ポスターを作ることを確認した。当日の運営は、1回目のイベントと同様に、参加してくれた地域の人に、ボッチャを知ってもらえるよう行動することや一緒にボッチャをして楽しむことが役割であることを確認した。

(3) 計画書の作成

生徒間で確認しながら、計画書を作成した。

(4) 「ボッチャが健康に良いこと」ポスターの作成

「ボッチャが健康に良いこと」の内容は、1回目のリーフレット作成時に調べた内容を、タブレット端末を使用してスライド作成に取り組んだ。役割を分担して取り組み、作成の途中で進捗状況を報告し、学級で確認しながら完成を目指した。

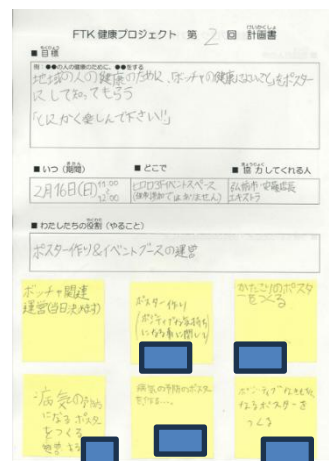


図11 サイクル2巡目
計画書



図12 「健康交流イベント」の様子

5 2/16 「健康交流イベント」の運営（サイクル2巡目）

サイクル1巡目と同様に運営を行った。

6 2/17 振り返り（サイクル2巡目）

（1）映像による振り返り

当日の映像を見て、自分たちの役割や成果、課題を探した。映像は、教師が場面を抽出し、生徒に気付かせるように提示した。

（2）客観的な評価の確認

参加者やスポーツインストラクター、担任からの感想を共有した。課題として、作成した「ボッチャが健康に良いこと」ポスターを掲示したが、見てくれた人が少なかったことを共有した。

（3）報告書の作成

「うまくいったこと・次回がんばりたいこと」を個人で記入した。記入後、学級で記入したことを共有した。

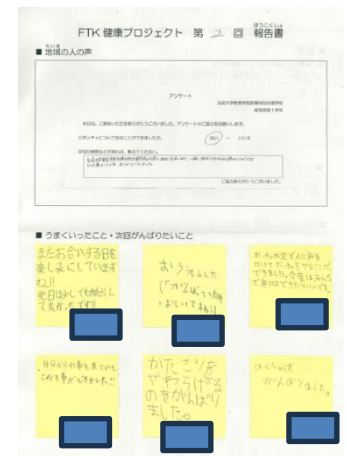


図13 サイクル2巡目
報告書

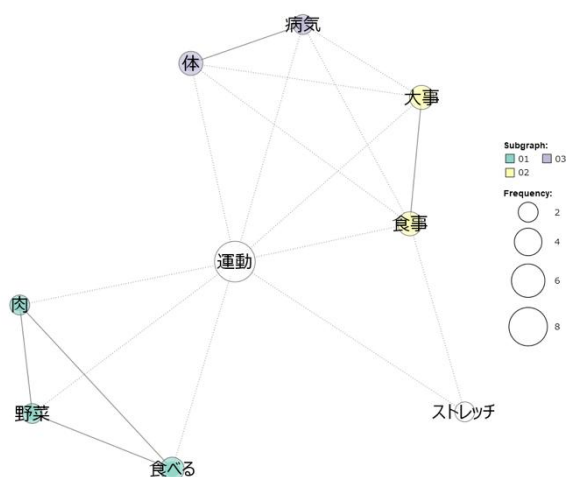
IV 結果

1 健康の知識・イメージの変容

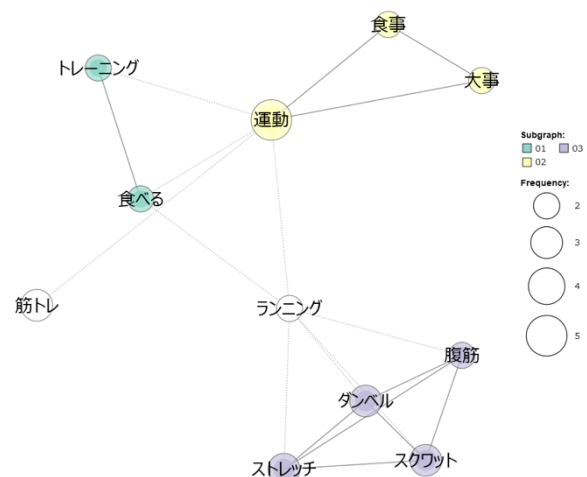
単元開始前及び中間（スポーツジム訪問後）、単元終了時における質問紙調査による「健康について知っていることやイメージを教えてください」の質問に対する記述の共起ネットワークを図5に示す。

3回とも、「運動」の出現頻度が最も高かった（「運動」を想起した生徒：5/6名）。単元開始前は、「食事」が「大事」であることや「肉」や「野菜」を「食べる」といった食事に関する単語が「運動」の次に多く出現した（想起した生徒：5/6名）。単元中間は、単元開始前に比べて、「ランニング」や「ダンベル」、「スクワット」、「腹筋」、「ストレッチ」といった具体的な運動の種類単語が出現した（想起した生徒：5/6名）。単元終了後は、単元開始前と単元中間に比べて、「ボッチャ」や「イベント」、「お手伝い」といったイベントでの取り組みに関する単語が出現した（想起した生徒：3/6名）。一方で、単元中間で出現した具体的な運動の種類単語の出現は減った。

単元開始前



単元中間



単元終了後

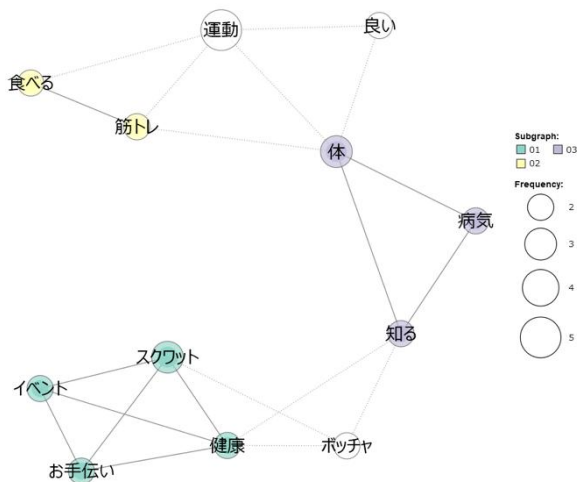


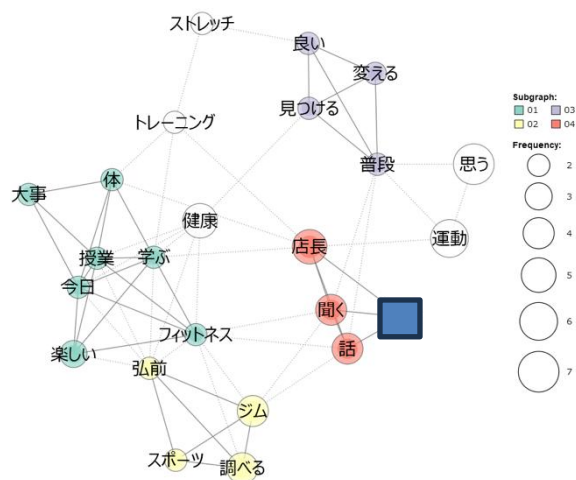
図14 健康の知識やイメージ 共起ネットワーク

2 授業後の感想の変容

単元前半及び単元後半の期間に行われた授業後の感想の記述の共起ネットワークを図6に示す。

単元前半は、「健康」や「スポーツインストラクター」、「運動」の単語が一番多く出現し、「スポーツインストラクター」の単語には、「聞く」や「(スポーツインストラクターの名前)」の単語に強いつながりが見られた。単元後半は、「ボッチャ」の単語が一番多く出現し、「交流」や「メンバー」の単語に強いつながりが見られた。また、新たな述語として、「教える」の単語が出現した。

単元前半



単元後半

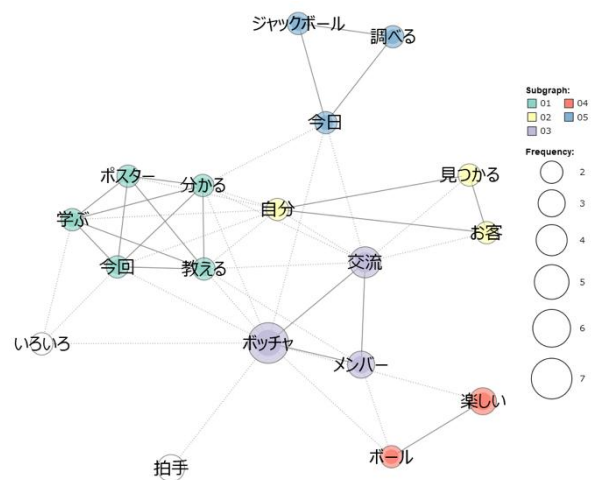


図15 授業後の感想 共起ネットワーク

3 エージェンシーに関連するエピソード

イベント1回目、2回目ともに、地域の人に投球の仕方やルールを説明する役割に取り組んだ生徒Aのサイクル1巡目の当日から、サイクル2巡目の振り返りまでにあったエピソードを以下に示す。

イベント1回目の当日は、参加者からの投球に関する質問に応じて説明するだけでなく、参加者が投球する前に自発的に言葉掛けして、簡単な投球の仕方やルールについて説明する様子が見られた。事後学習

の個人の振り返りでは、成果として「手本を見せながら、会話することができた」こと、課題として「お客さんをさらに多くする」ことを記述した（図7）。

イベント2回目の事前学習の目標設定・準備において、1回目の課題を踏まえて、地域の人に言葉を掛けて参加を促すことを目標にする発言があった。当日の最初は、個別で今日の目標や役割を確認した。また、教師から言葉を掛けるターゲットを伝え、行動を促した。その後、自発的に地域の人に言葉を掛けて、参加の承諾を得て、説明を開始する行動が数回見られた。事後学習の個人の振り返りでは、成果として「人に言葉を掛けてボッチャをやることができた」ことを記述した（図8）。具体的に聞いたところ、自分から人を集めることができたことと発言した。

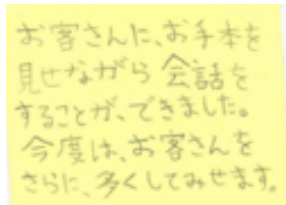


図16 1回目の振り返りの記述

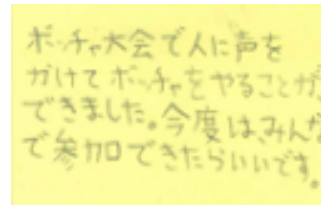


図17 2回目の振り返りの記述

V 考察と課題

本取り組みは、学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルによる健康教育の在り方を検討することであった。

1 健康の知識・イメージに関する考察と課題

単元中間では、単元開始前に比べて、具体的な「運動」の種類の単語が多く出現した。これは単元前半では、スポーツインストラクターによる「健康づくり」の授業やスポーツジム訪問による「当事者意識を促すための知識・理解への働き掛け」の影響であると考ええる。「健康づくり」の授業では、健康維持に必要な「運動」、「食事」、「心」の健康について学習し、家庭で簡単にできる「運動」も体験した。スポーツジム訪問では、地域の人が健康のために利用する施設を見学し、筋力トレーニングマシンや簡単なエクササイズを体験した。健康のための「運動」を数回体験したことが知識として定着し、イメージとして顕著に表れたと考察する。一方、「食事」や「心」の健康についても学習したが、関連単語の出現数に変化がなかったことから、体験的な学習や継続的な学習がより知識やイメージに影響を与えられる。

単元終了後では、単元開始前と中間に比べて、プロジェクトの実践として取り組んだ内容に関する単語が出現した。これは、イベントを「健康のため」の活動と目標を明確化したことで、実践内容が健康に関連すると認識できた生徒がいたためと考える。一方で、単元中間で見られた具体的な「運動」の種類の単語の出現が減少した。これは、質問紙調査において、多くの生徒が1つのイメージのみ記述し、直近の経験がイメージに大きく影響したことが要因と考えられる。このことから、評価するタイミングが結果に影響することを踏まえ、適切な評価時期を検討する必要がある。

本評価は対象生徒全員の記述を総合的に分析した結果である。テキストマイニング手法では、「頻度の低い語は分析できない(田垣, 2009)」ため、解釈上重要な語や個人の変容を見落とす可能性がある。テキストマイニング手法とKJ法を組み合わせることの意義が指摘されている(田垣, 2009)ことから、より包括的な評価方法を検討していく必要がある。

2 授業後の感想に関する考察と課題

単元前半では、「健康」や「スポーツインストラクターの名前」、「運動」の単語が一番多く出現した。これは、複数の生徒がスポーツインストラクターから健康や運動について学んだ経験に強い印象を受けたことを示している。「当事者意識を促すための知識・理解への働き掛け」として、地域と協働して健康

に関する知識を得る機会を提供できたと考える。

単元後半は、「ボッチャ」の単語が最も出現し、「交流」や「メンバー」との強い関連性が見られた。これは、複数の生徒が、スポーツジム利用者（メンバー）とボッチャを通して交流できた経験を重視していることを示している。関わる地域の人からスポーツインストラクターからメンバーへと広がり、関わる地域の人を段階的に広げることができた結果であると考えられる。また、「教える」という単語が「ボッチャ」と結び付いていることから、生徒が地域の人にボッチャを教えるという学びを発揮する場になっていたと考えられる。一方で、「健康」の単語が見られなかった点が課題である。イベント1回目では、ボッチャと健康の関連性を十分に理解させることができなかったと考えられる。2回目の実践では、「ボッチャが健康に良いこと」を明確な目標として授業を展開した。今後も、生徒が地域の人々の健康のためという目的意識をもちながら活動できるよう、支援していく必要がある。

3 エージェンシーに関する考察と課題

実践グループメンバーで協議し、生徒Aの行動をエージェンシーに関連する行動として取り上げた。生徒Aは、イベント1回目の振り返りにおいて、参加者を増やすことを課題として挙げた。イベント2回目では、地域の人に言葉を掛けて参加を促すことを目標に設定し、実際に当日は自ら積極的に言葉掛けを行う様子が見られた。この行動は、OECDが定義する「エージェンシー」（目標を設定し、振り返り、責任をもって行動することによって変化を起こす力）を発揮したものであると考えられる。

この成果を実現できた背景には、以下の支援体制があったと考察する。

第一に、実践の手続きとして行った「自立に向けて自分で健康を管理する」力の育成および地域協働型の学習活動の構築が土台として機能していたことである。平成29年～令和3年の校内研究で報告された「個別的で継続的な支援・スモールステップな目標設定支援」が、目標設定や振り返りの場面で重要な役割を果たした。また、イベントは、協働したスポーツインストラクターのネットワークを活用し、地域の方々との自然な交流機会を設定できた。このように地域協働型の学習環境を整えたことで、生徒の学習効果が高まったと考えられる。

第二に、生徒Aの特性を生かした役割設定が効果的であったことである。生徒Aは自分の知識を説明することに意欲的で、人との関わりを好む傾向がある。そこで、地域の人々に投球方法やルールを説明する役割を担当させることで、生徒Aの強みを発揮できる場を提供できたと考えられる。

第三に、学びを生かすサイクルによる効果である。このサイクルは生徒の目標設定や振り返りの機会を創出するだけでなく、教師が生徒の実践状況に応じて次のサイクルへの支援方法を検討する機会となった。今後も生徒の様子を観察しながら、計画書や報告書などの支援ツールを適切に調整し、生徒自身によって、目標を設定し活動を振り返る力を育成していくことが重要である。

4 まとめ

「自立に向けて自分で健康を管理する」力の育成及び地域協働型の学習活動の構築を通じて、生徒は運動に関する健康の知識や具体的なイメージを形成することができた。また、これらの実践の手続きは、学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルの土台となり、効果的な支援として機能した。

実施したサイクルの回数は限られていたが、この過程で目標設定や振り返りの機会が設定され、一部の生徒にはエージェンシーに関連する行動が見られるようになった。今後は、生徒一人ひとりの強みを生かせる場面をより意識的に設定するとともに、生徒の実践状況に応じてサイクルにおける支援方法を柔軟に調整していくことが重要である。

最終的な目標は、生徒自身が自分や地域の人々の健康について考え、主体的に目標を設定し、振り返りを行いながら責任をもって行動できる力を育てることである。このような学びの姿勢は、将来の社会生活においても重要な資質・能力になると考える。

VI 参考・引用文献

- ・文部科学省：特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編（上）（高等部），2019.
- ・光村まり，菅野敦：成人期知的障害者の健康問題に関する調査研究-生活習慣病と精神疾患から見る年齢別特徴と加齢の影響について-．東京学芸大学紀要 60：515-522，2009.
- ・スポーツ庁：令和5年度「スポーツの実施状況等に関する世論調査」の結果を公表します，2024.（2025年2月27日取得，https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/jsa_00167.html）
- ・スポーツ庁：令和5年度「障害児・者のスポーツライフに関する調査研究」の調査結果について，2024.（2024年10月24日取得，https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/houdou/jsa_00168.html）
- ・弘前大学教育学部附属特別支援学校：「こころ」と「からだ」の健康を主体的に考える子供の育成，弘前大学教育学部附属特別支援学校研究紀要 23，2022.
- ・弘前大学教育学部附属特別支援学校：地域の人たちとの社会的相互作用でアップデートする子供の学び．弘前大学教育学部附属特別支援学校研究紀要 24，2024.
- ・OECD：OECD Future of education and skills Education 2030，2018.（2024年1月9日取得，https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf）
- ・樋口耕一：KH-Coder 3，2023.（2025年2月27日取得，https://kxcoder.net/scr_r.html#netg）
- ・田垣正晋：市町村障害者基本計画のニーズ調査の自由記述回答に対するKJ法とテキストマイニングの併用のあり方．社会問題研究 58：71-86，2009.